

新岡垣風土記

第403回

岡垣の庚申塔と庚申信仰

岡垣歴史文化研究会 石田健次

庚申塔は、庚申信仰の庚申待を3年18回行った後に、供養塔として造立されることが一般的であった。この庚申塔は、岡垣町ではこれまでに37基が確認されているが、造立年が分かる庚申塔はすべて江戸時代に造立されている。塔に刻まれている碑銘は「庚申塔」「庚申尊天」「猿田彦天」「猿田彦大神」などがある。



▲岡垣町最古の庚申塔

造立年が分かるもののうち、岡垣町で最古のものは、野間の須賀神社の下にある庚申塔であり、江戸時代前期の元禄9（1696）年に造立されている。また、原区にある庚申塔は、幕末の文久2（1862）年のもので、その後に造立されたものは確認されていない。

庚申塔は、明治初期に邪教である民間信仰を禁止する政策の淫祠の禁が出されたことにより、造立されなくなった。岡垣町でも明治以降の庚申塔は確認されていないが庚申信仰としては続いてきた。

庚申信仰という名は庚申という干支に由来しており、庚申の年、庚申の日を縁日とする信仰である。昔は、年月日は十干（甲、乙、丙、丁……）と十二支（子、丑、寅、卯……）の組み合わせで決めていた。庚申はこの組み合わせの一つであり、60日に1回、1年では6回巡ってくることになる。

庚申待とは、庚申の日の夜に人々が夜を寝ずに過ごすというものである。庚申の夜になると、人の体の中にある三尸という虫

が体から抜け出して、その人の罪過を天帝に報告に行き、それによってその生命が奪われるため早死すると信じられていた。この三尸の虫が抜け出すのを防ぐために庚申の日は寝ずにいるというものである。これは、中国の民間道教の三尸説に由来するといわれている。

写真の庚申掛軸は、長さ160センチメートル、幅41センチメートルで、昭和25（1950）年に作られており、鮮やかに彩色されている。この掛軸は、山田区で行われていた「庚申様」の本尊として祀られたもので、平成の初め頃までこの行事は続いていた。掛軸の中央には、邪鬼を踏んだ一面六臂の



▲青面金剛の庚申掛軸

青面金剛像が本尊として描かれている。本尊の右の上手には三股叉、左手に剣、下手に矢を持ち、左手の上手には法輪、右手にはシヨケラといわれる女人像の頭髪をつかんで下げており、下手は弓を持っている。本尊の左右には侍童の姿があり、軸の上方には日と三日月が、下方には雌雄の鶏、御幣がかついでいる2猿と4鬼像が描かれている。

庚申に求める御利益は不老長生にあるといわれているが、五穀豊穡、豊漁・海上安全、商売繁盛、家内安全など多岐にわたっていた。前述の野間の庚申塔の前では干魃のときに、雨乞祈願が行われていた。